

---

# 咆吼

紅瞳 愁桜

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

咆吼

### 【Nコード】

N4562A

### 【作者名】

紅瞳 愁桜

### 【あらすじ】

己の過去と罪悪感に縛られた青年と、束縛された少女。二人の出会いが、止まっていた、互いの時間に息を吹き込んだ。二人の、運命という名の歯車は、今動き出した……。

## 序章：霞む存在

夕方のためか、日中に比べ人通りの少ない大街道。

その通りを危なげな足取りで一人の青年が歩いていた。

漆黒の髪を風になびかせながら歩いている。

いや、彷徨っていると言った方が良いだろうか。

散歩とは言えないような足取りで目的地もなく彷徨っている。

髪の色と同様に黒い鞘の日本刀を腰に差しているので一見、古流剣士のような様子はあ

しかし、古流剣士のような鋭さはその瞳にはなく、それどころか光すら宿っているようにも思えない。

青年からは無気力感も感じられるが、死に対する願望のようなものも感じられる気がした。

## 一章：交差する囚われ人

ふと青年が我に返るとそこは小高い丘の上だった。いつの間にか大街道を抜け、この丘へと無意識に向かっていたようだ。

ゆっくりと顔を上げ、青年は力のない目で丘の上に一本そびえ立つ木を見つめる。

秋になり、葉がすっかり枯れてしまった木は丘の上に静かに立ち、時折、風に吹かれ枝を揺らす。

風と共に降ってきた枯れ葉にまみれながら、青年はゆっくりと木にもたれかかり、座った。

崩れ落ちるように音もなく、座った。

しばらく風に揺られる枝を見ていた。

目の前で次々に枯れた葉が飛ばされていく。

その一枚一枚を目で追っていた。

静かに葉を見つめていると突然、青年が来た大街道の方向と逆方向、つまり丘を降りた先にある深い森の方から銃声のようなモノが聞こえた。

その騒音のために、一斉に落ちていく枯れ葉を虚ろな目で見つめる。

銃声が轟いても微動だにしなかったように、足音が多数、速いテンポで向かってきても何の反応もせずに枯れ葉を眺め続けていた。

草を踏む小さな音と共に、一つの足音が近付いてきた。

音の軽さとテンポの刻み方から、小さな子どもであることが分かる。

その足音がすぐ横で止まった。

その方角の後方からは無数の足音が未だに聞こえている。

何事かと、それでも光のない目で小さな足音の聞こえた方を見るとそこには、汚れ、痛んだ白いドレスに身を包んだ幼い少女が肩で息をしながら佇んでいた。

走ってくる途中に枝で引っかけたのだろうか。その白い肌には無数の紅い線がにじんていた。

また、少女の透きとおるような白い肌やドレスにはまるで合っていない、革と金属で作られた首輪のようなものが、少女の白く細い首を捕らえている。

首輪から続いている鎖を手から離し、その手で青年の黒い服の袖を引っ張った。

そんな少女の姿を見つめていた瞳が微かに揺らいだ。

俺に……愛しいあの人すら助けられなかったこの俺に、この子を助ける権利はあるのか……？

自問自答をしながらも少女を見つめていた。

先ほどの無気力な瞳ではなく、悲しみの色を浮かべた瞳で少女を見つめていた。

すると、今までうつむいていた少女がそのゆっくりと顔を上げた。腕の色と同じように透きとおった白色、しかし傷や汚れでくすんだ白色となってしまうている。

幼さが残るが整った顔立ちである。

くすんだ肌の白色よりも黒みがかかった、灰色の少女の瞳と視線が交わった。

その瞳には宝石のような涙が溢れるほど浮かんでいる。

その瞬間、青年の瞳に光が宿った。  
怒り、悲しみ、そして決意と意志の光がまざり、青年の漆黒の瞳を輝かす。

あの人には何もしてやることが出来なかった……。  
それは事実だ。

だが、今この子を助けることが出来るのは俺一人だけだ。  
十字架を背負っている、俺のこの軀でこの子を救えるのならば、この身など朽ちても構いやしない。

目の前で女性が死ぬのは、こりこりだ……。

十字架を下ろす権利はない。

十字架を背負ったまま墓場まで行く決心はできた……。

すつと立ち上がると、少女に優しく微笑みかけ、頭を撫でた。

薄いクリーム色の髪が指の間をすり抜けていく。

無言のまま手を下ろし、少女を軽々と抱き上げ、大樹の枝の上へ座らせた。

木の上の方へ上がるように指示すると、目線を落とし、少女がでてきた森の方を見つめた。

## 二章：冷たく表情のない殺気

足音がどんどん近付いてきている。

数は十二人程度、軽装備の大人の足音だな……。

そう判断すると軽く躰を動かした。

流石に躰は、なまっていけないようだ。刀の柄に右手を添え、戦闘感覚を呼び覚ましていく。

集中していると、ようやく追いついたのか、迷彩服に身を包んだ成人男女がでてきた。

ハンドガンからサブマシンガンまで腰に装備し、迷彩服のポケットには様々な投擲物、恐らく手榴弾のようなふくらみが確認できた。ベルトには接近戦専用の短剣が差されているようだ。

素早く敵の装備状態を確認すると、深呼吸をした。

そんな青年に気が付いたようだ。

全く隙が無く、いつでも銃器を取れるように構え、ゆっくりと青年の方へと男が歩いてきた。

青年まで後十メートルほどと言うところで立ち止まり、青年を観察し始めた。

青年の唯一の武器である刀を軽蔑したように見ると、顔を上げた。

「おい貴様。この方角に少女が一人走ってこなかったか？

グリード様の所有物の分際で脱走したのだが……。白いドレスで身を――

「さあな、全く知らないな。知ったところで貴様らなどに教えるか、

クズどもが……」

言葉を遮られた隊長らしき男が怒りをあらわにし、腰に下げていたショットガンを抜いた。

狙いは当然、青年の胸部である。

「貴様あ！ なめた口をききおつて！」

「うるさいな。貴様らはクズではなくハエだったようだ……」

そう静かに言うと、いつでも抜刀できるよう、居合いの構えをとり、殺気を解放する。

あまりにも冷たく表情のない殺気である。

怒りで興奮していた男の背にも、悪寒が走る。

そして何かに気付いた顔をした。

「まさか……あの黒髪、黒眼、黒服……それに金の細工を施された黒き鞘を持つあの男は……」

そうだ、ここまで鋭い殺気を出せるのはアイツだけだ。

あの伝説の『漆黒の稲妻』……カミシロ神代 レイ零か！

鬼神の強さを誇る伝説の男がなぜここに……」

驚愕しながらも、十二名全員がその殺気のために、足を動かすことも、ましてや銃器を抜き、引き金を引くなど不可能である。その場が緊張で満ち、静寂が訪れた。

しかし、何を血迷ったのか男が一人、雄叫びをあげながら走り込み、零に向かってサブマシンガンをフルオートで乱れ撃ちをする。

それがきっかけとなり、残りの十一名全員が各々の銃器で射撃を始めた。



辺りに大量の火薬の匂いと轟音が広がっていった。

### 三章：死闘

それぞれの持つ銃器が高熱を帯び始めた頃に、隊長の号令と共に連射が止まった。

いくら漆黒の稲妻といえども、コレでは蜂巢状態であろう。

そう判断し、砂埃が納まるのを待つ。

しかし、砂埃が晴れた時には既に、零の姿はそこにはなかった。音もなく、あの鉛玉の雨の中から脱出したことも驚きであるが、大樹に銃痕が残ってないところを見ると、なんらかの方法で無数の弾道をねじ曲げたようである。

その光景を目の当たりにし、混乱状態が広がっている部隊に一つの影が舞い降りた。

音もなく着地し、間をおかず残像を残しながら影が駆けめぐる。

ほんの一瞬の間に隊長を含め十人が地に平伏した。十人全員が頸動脈や頸静脈、眉間などを切断され小さく痙攣している。

あまりに見事で精確な刀捌き。まさに神業である。

しかし、零の刀捌きですら捕らえることの出来なかった二人が、零から五メートルほどのところで腰から刃渡り四十センチほどの短剣を抜いた。

短剣からは奇妙な音がし、刃が揺らいでいるように見える。その短剣を見、小さく零が舌打ちをした。

「……何で超振動ブレードなどを持つてんだ、貴様ら……」  
「……我らは『ハイエナ』。うぬも聴いたことがあるっ……?」

静かに答えた『ハイエナ』の二人組をにらむ。

「ああ、しつこくて邪魔くさい暗殺部隊の名前だろ?」

「……流石だ……だがその博識も、うぬの身の助けにはならぬ……」

そう言うや否や、超振動ブレードを構え、一気に零に斬りかかる。

流石は『ハイエナ』。

絶妙なコンビネーションと凄まじい速度で回避不能な攻撃を仕掛けてきた。

しかし、掌底で左側から来たブレードの柄を叩き、右側から来たブレードに刀をあわせ、手首をひねり捌く。

しかし『ハイエナ』も負けてはおらず、左側の奴は掌底の力を利用して蹴りを放ち、右側の奴は、間をおかず刃をひるがえし、再び斬りかってくる。

刀を返す暇がないので蹴ってきた足を踏み台にして、咄嗟に零は回避した。

差し違えてでもしとめるか……。

どうせ俺の命は無価値な命だ。それで未来のあるあの子が救えるならば……。

そう、決断し、地に着地するなり敵へと突っ込み鋭い突きを与えた。零の刀が『ハイエナ』の一人の心臓部に深々と突き刺さる。

しかし、刺された敵も流石に訓練されているらしく、血を吐きなが

らも零の左目にブレードを突き刺した。  
反射的に目蓋を閉じるが、超振動ブレードの前では存在しないのと  
等しく、呆気なく刃が侵入してきた。

耳障りな音と共に左目に激痛が走った。

しかし、それに構っている暇はなく、既に事切れた敵の躰を力一杯  
蹴り飛ばし、血降りをする。

そして残った右目でもう一人の姿を捕らえると、驚異的な速度で間  
合いをつめ、下方より斬り上げる。

しかし『漆黒の稲妻』といえども、左目を失ったため、敵のカウン  
ターに反応しきれなかった。

今度は左腕に激痛が走るが、傷の具合を確かめている暇はない。

片手だけで刀を振り抜く。

致命傷とまではいかないが、十分な傷を敵に与えることが出来た。

左手の感覚がないことから、相当な深手をこちらにも負ったようだ。

しかし、片手だけでもコイツならどうにか倒せるはずだ。

そう読み、零が再び攻撃に移った。

今度は『ハイエナ』も負けてはおらず、零の刀を捌いてくる。

しかし、戦闘経験が豊富な上に刃渡りのある刀を使う零の方に、少  
々分があるようだ。

浅い傷が『ハイエナ』の躰中に刻み込まれていった。

## 終章：死と生まれ変わり

このままでは殺されると悟り、形勢を変えるべく『ハイエナ』が地を蹴った。

もう一人の『ハイエナ』の屍のところまで退き、屍の手からブレードを奪い、間をおかず零に投擲した。

咄嗟の出来事で反応することが出来ず、右肺にブレードが刺さってしまった。

しかし、その痛みをこらえつつ、再び間合いをつめ、横に薙いだ。綺麗に刃が胸部に食い込み、そのまま横に赤い線が伸びていった。

力無く、それでも満足そうに『ハイエナ』が倒れていった。

血降りをすると、零は樹の方へ歩いていった。

しかし、樹にたどり着くや否や、小さなうめき声と共に地に平伏してしまった。

急いで少女が樹から降り、零に近付いたが、すでに零は血の海に沈み、肩で息をしていた。

苦しそうな表情で、それでも笑顔を作り少女に微笑んだ。

少女は泣きそうな顔で必死に零にしがみついている。

「俺はもう駄目だ……だが、その分までお前は生きろよ……」

血まみれの掌で少女の頭を撫でる。

クリーム色の髪に、紅い筋が入った。

小さな声で少女に囁く。

「しっかり生きろ……。お前は自由だ……。好きなところへ羽ばたいて行けるんだ……。ああ、そうだ……。これを持っていけ」

懐から小さな紙片と青い宝石のようなモノを取り出し、刀と共に手渡した。

血だらけの手から震えながらも少女はそれらを受け取った。

「この紙の……場所へ行つて……。その男に……。紙を見せれば俺の家を使えるようになる……。分かったか？」

涙を流しながら震える少女を抱きよせる。

少女は言葉にならない声で泣いていた。

そんな少女をとて愛おしく感じた。

「そう言えば……名前を聞いてなかったな……。名は何だ？」

「……ミ……漣……漣だよ」

「そうか……漣か……。なら今日から俺の姓を引き継ぎ、神代 漣として生きろ……。名前と共に……。お前は生まれ変わった……。んだ……」

とうとう堪えきれずに大声を上げ泣き崩れた少女を、強く抱きしめた。

俺の背負った罪は消えない……。だが、あの人への想いも、消えはしない……。

この子が俺の分まで幸せに長生きできるように……。願う……。

そして、少女に幸せに……と言ひ残し、その息を引き取った。  
泣き叫ぶ少女に腕を回したまま、静かにそれでも満足げな顔でこの  
世を去った。

少女は泣いた。

優しかった青年のため。

そして、その死のため。

声が囁かれても、日が変わっても泣き続けた。

やがて、涙も枯れ、零の躰を大樹の木の下に埋葬すると、重い足取りで紙に書いてある場所へと歩き出した。

この先、この子には「奴隷」という束縛はない。  
零の死と共に 手に入れた様々なモノ。

これから少女は「神代 澪」として生きていく。  
零の記憶と共に生きていく。

その先にあるのは 光か 闇か。

それが分かる者は いない。

## 終章：死と生まれ変わり（後書き）

呼んで頂き、まことにありがとうございます。  
いかがでしたでしょうか？

俺の感じたことが少しでも皆さんに伝わっていれば幸いです。  
それでは……本当にありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4562a/>

---

咆吼

2010年10月25日19時12分発行